

# 奇遇

芥川龍之介

青空文庫



へんしゅうしゃ  
編輯者

シナ  
支那へ旅行するそうですね。南ですか？ 北ですか

？

小説家 南から北へ周るつもりです。

編輯者 準備はもう出来たのですか？

小説家 大抵出来ました。ただ読む筈だった紀行や地誌などが、

未だに読み切れないのに弱っています。

編輯者 (気がなさそうに) そんな本が何冊もあるのですか？

小説家 存外ありますよ。日本人が書いたのでは、七十八日遊記、

支那文明記、支那漫遊記、支那仏教遺物、支那風俗、支那人気質、

えんざんそすい  
燕山楚水、  
そせつしやうかん  
蘇浙小観、  
ほくしん  
北清見聞録、  
ちやうこう  
長江十年、  
くわんこう  
観光

紀游、せいじんろく 征塵録、はしよく 滿洲、こなん 巴蜀、かんこう 湖南、しなふういんき 漢口、支那風韻記、支

那——

編輯者　それをみんな読んだのですか？

小説家　何、まだ一冊も読まないのです。それから支那人が書い

た本では、たいしんいつとうし 大清一統志、えんとゆうらんし 燕都遊覧志、ちようあんかくわ 長安客話、ていきよ 帝

京——

編輯者　いや、もう本の名は沢山です。

小説家　まだ西洋人が書いた本は、一冊も云わなかつたと思いま

すが、——

編輯者　西洋人の書いた支那の本なぞには、どうせ碌ろくな物はない

でしょう。それより小説は出発前まえに、きつと書いて貰えるでしょ

うね。

小説家 （急に悄気る<sup>しよげ</sup>） さあ、とにかくその前には、書き上げる

つもりでいるのですが、――

編輯者 一体何時<sup>いつ</sup>出発する予定ですか？

小説家 実は今日<sup>きょう</sup>出発する予定なのです。

編輯者 （驚いたように） 今日ですか？

小説家 ええ、五時の急行に乗る筈なのです。

編輯者 するともう出発前には、半時間しかないじゃありません

か？

小説家 まあそう云う勘<sup>かんじょう</sup>定<sup>じょう</sup>です。

編輯者 （腹を立てたように） では小説はどうなるのですか？

小説家 (いよいよ悄しよげ気る) 僕もどうなるかと思つて居るのです。

編輯者 どうもそう無責任では困りますなあ。しかし何しろ半時間ばかりでは、急に書いても貰えないでしょうし、……：

小説家 そうですね。ウエデキンドの芝居だと、この半時間ばかりの間あいだにも、不遇の音楽家が飛びこんで来たり、どこかの奥さんが自殺したり、いろいろな事件が起るのですが、——御待ちなさいよ。事によると机ひきだしの抽斗ひきだしに、まだ何か発表しない原稿があるかも知れません。

編輯者 そうすると非常に好都合ですが——

小説家 (机の抽斗を探しながら) 論文ではいけないでしょうね。  
編輯者 何と云う論文ですか？

小説家 「文芸に及ぼすジャアナリズムの害毒」と云うのです。

編輯者 そんな論文はいけません。

小説家 これはどうですか？ まあ、体裁の上では小<sup>しょう</sup>品<sup>ひん</sup>ですが、——

編輯者 「奇遇<sup>きぐう</sup>」と云う題ですね。どんな事を書いたのですか？

小説家 ちよいと読んで見ましようか？ 二十分ばかりかかれば読めますから、——

×

×

×

至順<sup>しじゆん</sup>年間の事である。長江<sup>ちやうかう</sup>に臨んだ古金陵<sup>こきんりやう</sup>の地に、王<sup>お</sup>

生<sup>うせい</sup>と云う青年があつた。生れつき才力が豊かな上に、容貌<sup>ようぼう</sup>もま

た美しい。何でも奇俊<sup>きしゆん</sup>王家郎<sup>おうかろう</sup>と称されたと云うから、その風<sup>ふう</sup>

采<sup>うさい</sup>想うべしである。しかも年は二十<sup>はたち</sup>になつたが、妻はまだ娶<sup>めと</sup>つ

ていない。家は門地<sup>もんち</sup>も正しいし、親讓りの資産も相当にある。詩

酒の風流<sup>ほしまま</sup>を恣にするには、こんな都合<sup>つごう</sup>の好い身分はない。

實際また王生は、仲の好い友人の趙<sup>ちやうせい</sup>生と一しよに、自由な

生活を送つていた。戯<sup>ぎ</sup>を聴<sup>き</sup>きに行く事もあつた。博<sup>はく</sup>を打つて暮らす

事もある。あるいはまた一晚中、秦淮<sup>しんわい</sup>あたりの酒家<sup>しゆか</sup>の卓子<sup>たくし</sup>に、

酒を飲み明かすことなぞもある。そう云う時には落着いた王生が、

花磁盞<sup>かじさん</sup>を前にうつとりと、どこかの歌の声に聞き入っていると、



陽気な趙生は酢蟹すがにを着に、金華酒きんかしゆの満まんを引きながら、盛んに妓ぎ品ひんなどを論じ立てるのである。

その王生がどう云う訳か、去年の秋以来忘れたように、ぼつたり痛飲を試みなくなつた。いや、痛飲ばかりではない。吃きつかつひよ喝くわく嫖賭うとの道楽にも、全然遠のいてしまつたのである。趙生を始め大勢の友人たちは、勿論この変化を不思議に思つた。王生ももう道楽には、飽きたのかも知れないと云うものがある。いや、どこかに可愛い女が、出来たのだろうと云うものもある。が、肝腎かんじんの王生自身は、何度その訳を尋ねられても、ただ微笑を洩らすばかりで、何がどうしたとも返事をしない。

そんな事が一年ほど続いた後のち、ある日趙生が久しぶりに、王生

の家を訪れると、彼は昨夜ゆうべ作ったと云つて、元稹げんしん体の会真詩かいしんしさんじゅういん  
 二十韻じゅうにふんを出して見せた。詩は花やかな対句たいくの中に、絶えず嗟さ  
 嘆たんの意が洩たらしてある。恋をしている青年でもなければ、こう云  
 う詩はたといいちぎよう一行いちぎようでも、書く事が出来ないに違ちがひない。趙生  
 は詩稿を王生に返すと、狡猾こうかつそうにちらりと相手を見ながら、  
 「君の鶯鶯おうおうはどこに居るのだ。」と云つた。  
 「僕の鶯鶯おうおう？ そんなものがあるものか。」

「嘘をつき給え。論より証拠はその指環さしわまじゃないか。」  
 なるほど趙生ちようせいが指さした几つくえの上には、紫金碧甸しこんへきでんの指環が  
 一つ、読みさした本の上に転がっている。指環の主は勿論男では  
 ない。が、王生おうせいはそれを取り上げると、ちよいと顔を暗くした

が、しかし存外平然と、徐ろおもむにこんな話をし出した。

「僕の鶯鶯なぞと云うものはない。が、僕の恋をしている女はある。僕が去年の秋以来、君たちと太白たいはくを挙げなくなったのは、確かにその女が出来たからだ。しかしその女と僕との関係は、君たちが想像しているような、ありふれた才子の情事ではない。こう云ったばかりでは何の事だか、勿論君にはのみこめないだろう。いや、のみこめないばかりなら好いいが、あるいは万事が嘘のような疑いを抱きたくなるかも知れない。それでは僕も不本意だから、この際君に一切の事情をすっかり打ち明けてしまおうと思う。退屈でもどうか一通り、その女の話しやうごうを聞いてくれ給え。

「僕は君が知っている通り、松江しょうこうに田を持っている。そうし

て毎年秋になると、一年の年貢ねんぐを取り立てるために、僕自身あそこへ下くだつて行く。所がちようど去年の秋、やはり松江へ下つた歸りに、舟が涇塘いとうのほとりまで来ると、柳や槐えんじゆに囲まれながら、酒旗ゆきを出した家が一軒見える。朱塗りの欄干らんかんが画えがいたように、折れ曲つている容子ようすなぞでは、中々大きな構えらしい。そのまた欄干の続いた外には、紅い芙蓉ふようが何十株なんじつかぶも、川の水に影を落している。僕は喉のどが渴かわいていたから、早速その酒旗の出ている家へ、舟をつけろと云いつけたものだ。

「さてそこへ上あがつて見ると、案あんの定家じようも手広ければ、主あるしおの翁きなも卑あしくない。その上酒は竹葉青ちくようせい、肴さかなは鱸すずきに蟹かにと云うのだから、僕の満足は察してくれ給え。實際僕は久しぶりに、旅りよし愁ゆうも何も

忘れながら、陶然と盃を口にしていた。その内にふと気がつく  
と、誰か一人幕の陰から、時々こちらを覗くものがある。が、僕  
はそちらを見るが早いか、すぐに幕の後へ隠れてしまう。そうし  
て僕が眼を外らせば、じつとまたこちらを見つめている。何だか  
翡翠の簪や金の耳環が幕の間に、ちらめくような気がするが、確  
かにそうかどうか判然しない。現に一度なぞは玉のような顔が、  
ちらりとそこに見えたように思う。が、急にふり返ると、やはり  
ただ幕ばかりが、懶そうにだらりと下っている。そんな事を繰り  
返している内に、僕はだんだん酒を飲むのが、妙につまらなくな  
って来たから、何枚かの錢を抛り出すと、  
々々また舟へ帰つて  
来た。

「ところがその晩舟の中に、独りうとうとと眠っていると、僕は夢にもう一度、あの酒旗の出ている家へ行つた。昼来た時には知らなかつたが、家には門が何重もある、その門を皆通り抜けた、一番奥まつた家の後に、小さな綉閣が一軒見える。その前には見事な葡萄棚があり、葡萄棚の下には石を畳んだ、一丈ばかりの泉水がある。僕はその池のほとりへ来た時、水の中の金魚が月の光に、はつきり数えられたのも覚えてゐる。池の左右に植わつてゐるのは、一二株とも垂糸檜に違ひない。それからまた牆に寄せては、翠柏の屏が結んである。その下にあるのは天工のように、石を積んだ築山である。築山の草はことごとく金糸線綉墩の属ばかりだから、この頃のうそ寒にも凋れていな

い。窓の間には彫花ちようかの籠かごに、緑色の鸚鵡おうむが飼つてある。その鸚鵡が僕を見ると、「今晚は」と云つたのも忘れられない。軒の下には宙に吊つた、小さな木鶴もっかくのひとつが一ひとつが双ひつがいが、煙の立つ線香を啣くわえている。窓の中を覗いて見ると、几つくえの上の古銅瓶こどうへいに、孔雀くじやくの尾が何本も挿さしてある。その側にある筆硯類ひつげんるいは、いずれも清楚いそと云うほかはない。と思うとまた人を待つように、碧玉しよくの簫しょうなどもかかっている。壁には四幅しふくの金花箋きんかせんを貼つて、その上に詩が題してある。詩体はどうも蘇東坡そとうぼの四時しじの詞しに倣ならつたものらしい。書は確かに趙松雪ちようしょうせつを学んだと思う筆法である。その詩も一々覚えているが、今は披露ひろうする必要もあるまい。それより君に聞いて貰いたいの、そう云う月明りの部屋の中に、たった一

人坐っていた、玉人ぎよくじんのような女の事だ。僕はその女を見た時

ほど、女の美しさを感じた事はない。」

「有美ゆうび閨けい房ぼう秀しゅう 天人てんじん 謫たく降こう来きたるかね。」

趙生ちようせいは微笑しながら、さつき王生おうせいが見せた会真詩かいしんしの冒

頭の二句を口ずさんだ。

「まあ、そんなものだ。」

話したいと云った癖に、王生はそう答えたぎり、いつまでも口を噤つぶんでいる。趙生はどうとう待兼ねたように、そつと王生の膝を突いた。

「それからどうしたのだ？」

「それから一しよに話をした。」



「話をしてから？」

「女が玉簫ぎよくしやうを吹いて聞かせた。曲は落梅風きよくらくばいふうだっと思うが、

――

「それぎりかい？」

「それがすむとまた話をした。」

「それから？」

「それから急に眼がさめた。眼がさめて見るとさつきを通り、僕は舟の中に眠っている。艙そうの外は見渡す限り、茫々とした月夜つきよの水ばかりだ。その時の寂しさは話した所が、天下にわかるものは一人もあるまい。

「それ以来僕の心うちの中では、始終あの女の事を思っている。する

とまた金<sup>きんりよう</sup>陵<sup>りよう</sup>へ帰つてからも、不思議に毎晩眠りさえすれば、必ずあの家<sup>うち</sup>が夢に見える。しかも一昨日<sup>おととい</sup>の晩なぞは、僕が女<sup>す</sup>に水<sup>いしよう</sup>晶<sup>せいよう</sup>の双魚<sup>そうぎよ</sup>の扇墜<sup>せんつい</sup>を贈つたら、女は僕に紫金碧甸<sup>しこんへきでん</sup>の指環を抜いて渡してくれた。と思つて眼がさめると、扇墜が見えなくなつた代りに、いつか僕の枕もとには、この指環が一つ抜き捨ててある。してみれば女に遇<sup>あ</sup>つてゐるのは、全然夢とばかりも思われぬ。が、夢でなければ何だと云うと、——僕も答を失してしまふ。

「もし仮に夢だとすれば、僕は夢に見るよりほかに、あの家<sup>うち</sup>の娘を見たことはない。いや、娘がいるかどうか、それさえはつきりとは知らずにゐる。が、たといその娘が、実際はこの世にいない

のにしても、僕が彼女を思う心は、変る時があるとは考えられない。僕は僕の生きている限り、あの池だの葡萄<sup>ぶどう</sup>棚<sup>だ</sup>の緑色の鸚<sup>お</sup>鵡<sup>うむ</sup>だのと一しよに、やはり夢に見る娘の姿を懐しがらずにはいられまいと思う。僕の話と云うのは、これだけなのだ。」

「なるほど、ありふれた才子の情事ではない。」

趙<sup>ちようせい</sup>生<sup>せい</sup>は半ば憐<sup>あわれ</sup>むように、王<sup>おうせい</sup>生<sup>せい</sup>の顔へ眼をやった。

「それでは君はそれ以来、一度もその家<sup>うち</sup>へは行かないのかい。」

「うん。一度も行った事はない。が、もう十日ばかりすると、また松<sup>しょうこう</sup>江<sup>くた</sup>へ下る事になっている。その時渭<sup>いとう</sup>塘<sup>たう</sup>を通ったら、是非

あの酒旗<sup>しゆき</sup>の出ている家へ、もう一度舟を寄せて見るつもりだ。」

それから実際十日ばかりすると、王生は例の通り舟を艤<sup>ぎ</sup>して、

川<sup>かわ</sup>下<sup>しも</sup>の松江へ下つて行つた。そうして彼が歸つて来た時には、

——趙生を始め大勢の友人たちは、彼と一しよに舟を上<sup>あが</sup>つた少女の美しいのに驚かされた。少女は實際部屋の窓に、緑色の鸚鵡<sup>おうむ</sup>を飼いながら、これも去年の秋幕<sup>まく</sup>の陰<sup>かげ</sup>から、そつと隙見<sup>すきみ</sup>をした王生の姿を、絶えず夢に見ていたそうである。

「不思議な事もあるものだ。何しろ先方でもいつのまにか、水晶の双魚の扇墜<sup>せんたい</sup>が、枕もとにあつたと云うのだから、——」

趙生はこう遇<sup>ひとご</sup>う人<sup>ひと</sup>毎<sup>ごと</sup>に、王生<sup>わうせい</sup>の話を吹<sup>ふい</sup>聴<sup>ちやう</sup>した。最後にその話が伝わつたのは、錢塘<sup>せんとう</sup>の文人瞿祐<sup>くゆう</sup>である。瞿祐はすぐここの話から、美しい涓塘<sup>いとう</sup>奇遇<sup>きぐう</sup>記<sup>き</sup>を書いた。……

×

小説家 どうです、こんな調子では？

編輯者 ロマンティックな所は好いいようです。とにかくその小しやうひ品んを貰もらう事にしまししょう。

小説家 待つて下ください。まだ後あとが少し残のこっているのです。ええと、美しい渭塘奇遇記いとうきぐうきを書かいた。——ここまでですすね。

×

×

×

×

×

しかし錢塘の瞿祐は勿論、趙生などの友人たちも、王生夫婦を載せた舟が、渭塘の酒家を離れた時、彼が少女と交換した、下のしものような会話を知らなかった。

「やつと芝居が無事にすんだね。おれはお前の阿父おとうさんに、毎晩お前の夢を見ると云う、小説じみた嘘をつきながら、何度冷々ひやひやしたかわからないぜ。」

わたし「私もそれは心配でしたわ。あなたは金陵きんりょうの御友だちにも、やっぱり嘘をおつきなすつたの。」

「ああ、やっぱり嘘をついたよ。始めは何とも云わなかったのだが、ふと友達にこの指環ゆびわを見つけたものだから、やむを得ず

阿父さんに話す筈の、夢の話をしてしまったのさ。」

「ではほんとうの事を知っているのは、一人もほかにはない訳ですわね。去年の秋あなたが私の部屋へ、忍んでいらしった事を知っているのは、——」

「私。私。」

二人は声のした方へ、同時に驚いた眼をやった。そうしてすぐに笑い出した。帆ほぼしら檣しらに吊った彫ちようか花かの籠かごには、緑色の鸚鵡おうむが賢そうに、王生と少女とを見下している。……………

×

×

×

編輯者 それは蛇足だそくです。折角の読者の感興をぶち壊すようなものじゃありませんか？ この小品が雑誌に載るのだったら、是非とも末段だけは削けずつて貰います。

小説家 まだ最後ではないのです。もう少し後あとがあるので、まあ、我慢して聞いて下さい。

×

×

×

しかし錢塘の瞿祐は勿論、幸福に満ちた王生夫婦も、舟が渭塘



を離れた時、少女の父母が交換した、下の<sup>しも</sup>ような会話を知らなかつた。父母は二人とも目<sup>ま</sup>かけをしながら、水<sup>みずぎわ</sup>際の柳<sup>えんじゆ</sup>や槐<sup>えんじゆ</sup>の陰<sup>かげ</sup>に、その舟を見送っていたのである。

「お婆さん。」

「お爺さん。」

「まずまず無事に芝居もすむし、こんな目出たい事はないね。」

「ほんとうにこんな目出たい事には、もう二度とは遇<sup>あ</sup>えませぬね。ただ私は娘<sup>むすめ</sup>や婿<sup>むこ</sup>の、苦しそうな嘘を聞いているのが、それはそれは苦勞でしたよ。お爺さんは何も知らないように、黙っているとお云いなすつたから、一生懸命にすましていました<sup>いまさら</sup>が、今更<sup>いまさら</sup>あんな嘘をつかなくつても、すぐに一しよにはなれるでしょうに、

「

「まあ、そうやかましく云わずにやれ。娘も婿も極きまり悪さに、智ち

えぶくろ

慧袋えぶくろを絞しぼつてついた嘘だ。その上婿むすめの身になれば、ああでも云

わぬと、一人娘は、容易やすにくれまいと思おもつたかも知れぬ。お婆おばさん、お前はとうしたと云うのだ。こんな目出めでたい婚礼けいらいに、泣ないてばかりいてはすまないじゃないか？」

「お爺おやさん。お前まへさんこそ泣ないている癖くせに……」

×

×

×

小説家　もう五六枚でおしまいです。次手ついでに残りも読んで見ましよう。

編輯者　いや、もうその先は沢山です。ちよいとその原稿を貸して下さい。あなたに黙って置くと、だんだん作品が悪くなりそうです。今までも途中で切った方が、遥はるかに好かつたと思いますが、——とにかくこの小しょう品ひんは貰いますから、そのつもりでいて下さい。

小説家　そこで切られては困るのですが、——  
編輯者　おや、もうよほど急がないと、五時の急行には間まに合いませんよ。原稿の事なぞはかまっていずに、早く自動車でも御呼びなさい。

小説家　　そうですね。それは大変だ。ではさようなら。何なにぶん分よ  
ろしく。

編輯者　　さようなら、御機嫌好う。

(大正十年三月)

# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 奇遇

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>